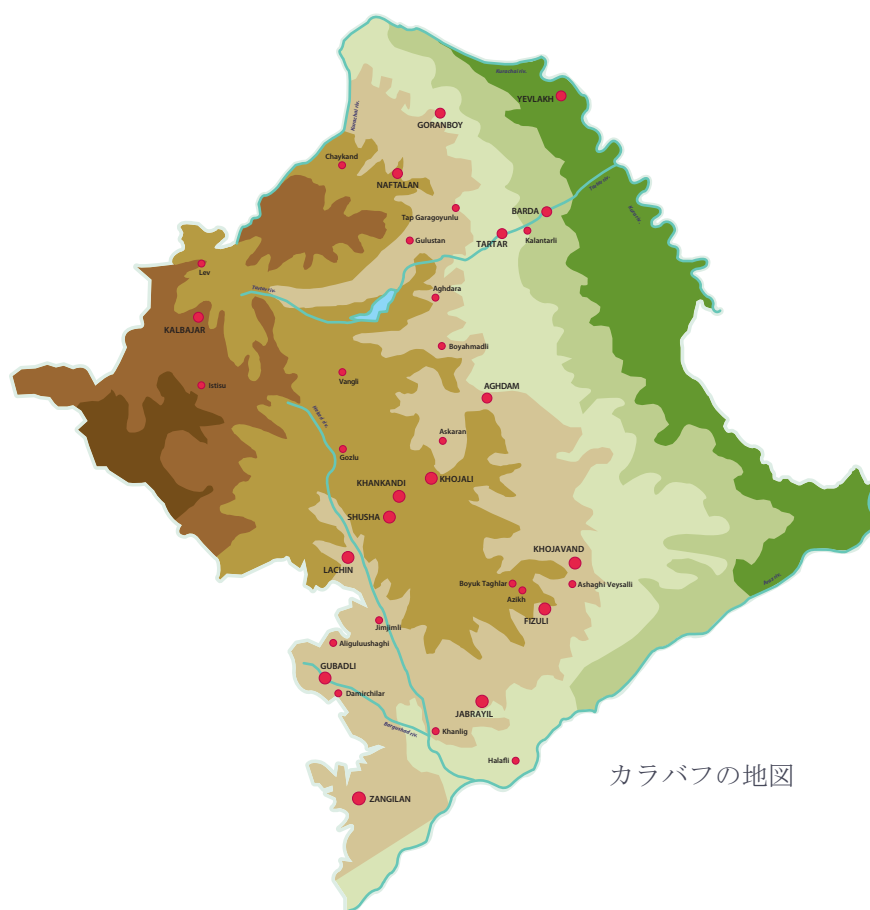


# カラバフ—— アゼルバイジャンの心

ヴァギフ・ピリエフ  
歴史学博士



カラバフの地図

カラバフは、13世紀および14世紀を含み、歴史全期にわたり、アゼルバイジャンの不可欠な一部であった。

ロシアの著名な東洋学者、A. ヤクボフスキ氏が指摘したように、当時は「アゼルバイジャン」と題し、現在の南部（イラン）のと北部（旧ソビエト）のアゼルバイジャンの領土とされていた<sup>1</sup>。その国境は、ゼンジャーン域からデルベンド域に、ゴイチャ湖からカスピ海に伸びていた。アゼルバイジャンの中にはアゼルバイジャン、アラン、シルバンとムガンの県（州）が入っている。これらはサファヴィー国家のアゼルバイ

ジャン・ビラヤット（州）の社会経済的、政治的、民族的、文化的の見解から不可分の部分であった。当時、カラバフはアランの中に入っており、その中心地であり、心であった、と根拠が明らかにしている<sup>2</sup>。(2)

「カラバフ」という地名がアゼルバイジャン内のみならず、カルス、北コーカサス、トルクメニスタン、ウズベキスタン、アフガニスタン等々でも見かける<sup>3</sup>。(3) また、アゼルバイジャンに「スルハブ・カラバフ」や「タブリーズ・カラバフ」<sup>4</sup> (4) や「アラン・カラバフ」といった地方もあった。それらの地方は、「人民と園」、「大きな園」、「素晴らしいところ」という意味づけの「カラバフ」と名付けるのがそこの自然の美しさに恵まれていたことと関係している。周知のとおり、中世後期のアランは、クラ川及びアラズ川の間領域を占めていた。「アラン・カラバフ」というのは、他のカラバフ等、とりわけ、カスピ海の東に位置していた「バグデス・カラバフ」との区別をつける目的で呼ばれていたわけである。

また、中世期の資料では、特に13世紀から14世紀にかけて関連したものの中では、「ナゴルノ・カラバフ」という用語が見当たらないと言っておきたい。歴史上はカラバフの高地及び平地が経済的・文化的に密接に結び付かれ、互いに相補っていたのである。アリ・クトビ・アリ・アハリ歴史学者（14世



紀) がカラバフを「アランの都」と名乗る<sup>5</sup>。一次資料にからすれば、カラバフの領土がアラズ川から土地を包含し、北西方向からベイラガンの東及びグシュタスフィーガムチャイの境まで延長していた。ハムドゥラフ・カズビニ氏が伝えるところ、カラバフの境がアラズ川まで延長していた<sup>6</sup>。ゲクチャの北にゼガム及びベイラガンが位置していた地方がカラバフと関係があったという事実<sup>7</sup>、そしてカラバフのシルヴァンの境界に位置していたこと<sup>8</sup>、カラバフ貿易路がクラ川とアラズ川の合流点からトビリシまで延長していたこと<sup>9</sup> が上述したところを明らかにしている。カラバフとアランという地名がたまに同一と認められるが、ファズラフ・ラシダディン氏が「カラバフ地、ムガン地、アラン地、シェキ地」<sup>10</sup> のように説明しているのが上記に反論しているのがある。また、ラシダディン氏がカラバフ領土に関する事実

をも挙げている。彼は、「ガファンの領土がナヒチェバン・トゥマンに附属している」と指摘し、ナヒチェバン・トゥマンがカラバフと隣接していたということがわかる<sup>11</sup>。以上を踏まえ、13世紀及び14世紀にカラバフの境が南にアラズ川まで、南西にハカリ川まで、北西にゼガムチャイまで、北と北東にクラ川（シルバンの領土）まで、南東にグシュタスフィーまで延長しており、高地と平地を統合する共通の行政単位が存在していたことが明らかになっている。

13世紀及び14世紀にカラバフは、アゼルバイジャンで起こっていた社会的・政治的な事件の中心地の一つであった。フラガイド及びジャライリドの国々の統治者が常にカラバフで休養しており、国の幾つか重要な問題についてここで考えていたとのこと。そして、モンゴルの王侯であるガザンカーンとアルパカーンがカラバフで即位



し、統治者のアルグンカーンとアブサイドがここで死亡したと言われている。カラバフは、フラガイド及びジャライリドの王子（サトゥベイ・ハトゥン、彼女の息子であるスルガン、ムハッメド・ベイ・グシュチュ）が統治していた。1343年にはカラバフではハジ・ハムフ、ムライド、ハカン・チョバニ・イフタジ及びヒュセイン・アンブガ等が率いた暴動が起こり、1351年にはダル・バヤジドが暴動を起こした。それらの暴動は、大苦勞で鎮静された。チョバニド封建者に反する闘争ではカラバフの上流階層、例えば、ガジ・ムヒヤディン・バルダイが活発に関与していた。シルバンシャーのカヴス、ジャライリドの統治者シェイフ・ウベイス(1359-1374)、そしてエミル・ティムルがカラバフに於いて大きな名声を享受したということである。<sup>12</sup>

12世紀—13世紀にカラバフの高地においてハチェン公

国があった。ハチェンは、マガラ区としてアランの一部であり、接近しがたい山岳地と雑木林の土地を占めていた。ハチェン要塞が公国の中心地であり、大事な築城であった。ハチェン公国の成立が古代アルバン国の復興を意味していた。この公国の最盛期が、「アルバンの王様」や「アルバン地域の統治者」や「ハチェンとアルツァー国の公爵」と呼ばれていたハサン・ジャラルの統治期(1215-1261)になる。ハサン・ジャラルの家柄が偉大なアルバン公爵であったメフラニド朝まで遡る。<sup>13</sup> また、A.オルベン氏がハチェン公国が古代アルバン国の一部であった、と述べている。<sup>14</sup> だから、碑銘文ではハサン・ジャラルが自らを「アルバンの王様」と名付け、彼を「アルメニア化する」試みが歴史的な現実から遠い存在であり、ハチェン王国をアルメニア領土として紹介する目的を持っていることが明確である。

13世紀初頭に北アゼルバイジャンの一部であったハチェン王国がモンゴル人及びホレズムシャーのジャララディンより攻撃されていた。ハチェンの統治者のハサン・ジャラルは、モンゴルの連隊長ジュシ・ブガ、ジャララディンのワズィールであったシャラフ・アリ・ムリック、そしてバトゥ・ハン(1227-1255)と交流し、親戚関係をつくったおかげで、領土及び政權を維持することができたのである。彼は、1225年にモンゴルにおいてバトゥ・ハーンの息子、サルタンと一緒にメング・カーンの接待会に参加したので、自らの政權をさらに強化した。ハサン・ジャラルの統治期に於いて様々な建物が建設され、その中でもガンザサル修道院(1240)が建築され、モイセイ・カアンカトリ歴史学者の著書「アルバンの歴史」に13世紀のアルバン国について訂正が行われた。しかし、1261年にモンゴルのアルグン王侯の命令によってハサン・ジャラルが殺され、その後は彼の息子であったジャラル・アタベイが公爵となり、1287まで収めていた。そして、その年にもハチェン王国が消滅した。

カラバフ領土は歴史上自然の幸に恵まれていたことで有名だった。当時の歴史学者、ハムドゥラフ・カズビニ氏はカラバフの領土を占めていた地方について語っている。それは、ヘイラク、バルダ、シャムキル、ギャンジャであるとのこと。カラバフの



領土はクラ川とアラズ川の水に灌漑され、著しい豊穰率と高い収穫率で有名であり、牧畜業の開発に有利な条件を持っていた。イオガン・シリトベルゲン氏が、世界最良の絹がカラバフのクラ川岸で生産されていると述べる。カラバフはアゼルバイジャンの最も重要な貿易中心地であった。フラグイド国の貿易路の北の主要な支線がカラバフを通していた。その支線の長さが45ファルサンフ（約280-300キロメートル）あり、そこにハル、ガルク、レンベラン、バザルジク、バルダ、ジュズブズ、ディフ・イスファガン、ハニヤガフ・シュトゥル、ギャンジャ、シャムキル、ユルト・シャデクバン、アクスタファ、ヤム等々の市町が位置していた。そして、その支線はトビリシまで、そこから西北まで延長していた。<sup>15</sup>

カラバフの民族構成に関しては、その領土で活発な民族プロセスが起こっていたことについて述べる必要がある。Z. M. ブニヤートフ氏によると、モンゴル人の征服の前にアランの人口がテュルク語系として形成されたとのこと。<sup>16</sup> 当時、「アジャイブ・アッドウニヤ」の資料からすれば、テュルク民族はアランの主要な民族的な部分であり、ここにて10万人以上ものテュルク人の騎手が居た。アランは「イスラム教徒の支配下であった」。「アランの全員のテュルク人を集合したら、それは蟻といなごのよう



に見えるのである」と書かれている。<sup>17</sup> 周知のように、13世紀半ば、モンゴル人の出征にあたり、アゼルバイジャンに幾つかのモンゴル・タタールの部族が来て、特にカラバフに住みついた。研究者によれば、上部ガルフン・下部ガルフン（イエブラフ於）、ボザルガンリ（トヴズ於）、ダンガリ（アグダリヤ於）、ドランラル（ホジャヴェンド於）、グルガン（フィズリ於）、ガンリケンド（ケリバジャル於）、タタール（グバドリ於）、タタールリ（シャムキル於）、ハチンドルバトリ（アグダム於）の地名の由来がモンゴル人出征の時に来た部族らと関係している。当時、カラバフの人口は、高地、特にハチェン公国の領土

に集中していたアルバン部族が依然として大きな部分を占めていたのだ。

カラバフ、アラン、コーカサスのアルバン国の領土は、歴史にわたり、他人の根拠のない特許請求の目的であった。この点で、中世初期関連のアルメニアの地図が注目を集めている。S. G. イェレミヤン氏の1982年にエレバンで出版された『701-862年のアルメニアと隣国』での地図がアルメニア人の領土権主張の良い例となる。その地図においては、コーカサスアルバン国の全領土、また黒海の周辺の南東部の土地、とりわけウルミア湖付近の土地が所謂「アルメニア」の領土として表示されている。それは、アラブ人よりコーカサスアルバン

キャラバジャル



イシティス」保健センターの全景



国が占領された後にアルメニア人に与えられたかのように思われる。実際は、アラブ人よりコーカサスアルバン国（北アゼルバイジャン）及びアトラパテナ（南アゼルバイジャン）の占領後、それらの領土がアラブ帝国の一部となり、統一アゼルバイジャンを成立する目的でそれらの地方を統合するプロセスが行われていたのである。また、アルメニア人の領土権主張は、今後の時代においても、特に13世紀—14世紀の地図でも見られる。B. A. アルチュニャン氏が『14世紀—15世紀初頭のティムール侵略とのコーカサス民族の闘争（ザカフカジエ）』（エレバン、1981—1982年）にて現代トルコのシヴァスからカラバフにかけて（カラバフ自体が含まれていないことが注意深い）巨大な土地を「アルメニア」として示している。

一次資料を見ると、アルメニア人の神話学化された見

解に反論しており、アルメニアはカラバフのみならず、アランにも関係がなかったことを明らかにしている。事実を見よう。

—ハムドゥラフ・カズビニ氏によると、「アルメン地域は二つに分けられている。それは、「大アルメニア」と「小アルメニア」である。「小アルメニア」はイランの中に入っていない。「大アルメニア」はイランの中に入っており（即ち、フラグイドの国境に隣接している）、行政企画上は小アルメニア、ルマ、ディヤルベキル、クルヂスタン、アゼルバイジャン、アランまで延長するアフラット・チュメンよりなっている。中央がアフラット市となり、収入が39トゥマンとなっている」<sup>18</sup>；

—「アラン州は、アラズ川及びクラ川の間にある土地である」；

—「アラン州及びムガン州の記述（中略）それらはアル

マンと接している」<sup>19</sup>；

—「アラン州の長さと同幅が約30と40ファルサンプ（つまり、210と280キロメートル）、クラ川の長さがアラズ川と合流点までがアラン州内である」<sup>20</sup>；

—「そこにはアラニという大きな国があり、（中略）西の隣国がアルメニアである」<sup>21</sup>；

—「ギョクチャ・タンギズ湖がアゼルバイジャン・アルメニアの境にある」<sup>22</sup>。

このように、中立の一次資料は、アゼルバイジャンの先祖代々へのアルメニア人の領土権主張に応じて説得力のある論拠を持っている。そもそも、「大アルメニア」という用語は、アルメンといったアゼルバイジャンの西にあり、アランの中に入っていた僅かな土地を意味している。アルファット（イフラット）のチュメンを些かに占められるその土地は、フラフイド国の中に入っていたが、アゼル





バイジャン州（歴史上のアトラパテナ）だけでは九つのテュメンがあった。

アルメニア側は、領土権主張と並びに、アラン・カラバフの人口が民族的にアルメニア人で、その地域の人口の大半を占めていたというような根拠のない論証を立て、それはアルバン文化を奪おうとしているのではあるまいか。アルメニアの弁解者達はアゼルバイジャンの古来土地への領土権主張に対してはカラバフのキリスト教のアルバン人がアルメニア人であるという見解をよく利用している。この見解の非科学性さは、キラコス・ガンザケツィ氏の著書に於いて明らかになっている。彼は、アルバン民族がアルメニア人と関係がない、グ

ルジア人やアフヴァン人について語っており、アルバン国はアルメニアと別の存在のように記述している。

カラバフは13世紀及び14世紀に於いてアランの中央にある高地及び平地からなる地方で、アルメニア人とは何の関係をも持たずに、そのキリスト教徒の人口がアルバン人であった。上記をふまえて、カラバフは歴史にわたってアゼルバイジャンの心であったと敢えて言える。◆

#### 参考文献：

1 Греков Б., Якубовский А. Золотая Орда. - Л., 1937, с. 55. (В. Греков, А. Якубовский, 『ジョチ・ウ

ルス』、レニングラード、1936、55頁)

2 Абу Бакр ал-Кутби ал-Ахари. Тарих-и Шейх Увейс. -Баку, 1984, с. 132. (Абу・バクル・アリ・クトビ・アリ・アハリ、『ターリヒ・シェイフ・ウベイス』、バクー、1984、132頁)

3 Гейбуллаев Г.А. Топонимия Азербайджана. - Баку, 1986, с. 145. (G. A. ゲイブライエフ、『アゼルバイジャンの地名学』、バクー、1986、145頁)

4 Шараф-ад-дин Али Йазди. Зафарнаме. - Ташкент, 1972 (на фарсидском), с. 182. (Шярафаддин・アリ・ヤジディ、『ザファルナメ』(ペルシア語)、タ

13世紀—14世紀のカラバフ



- シケント、1972、182頁)
- 5 Абу Бакр ал-Кутби ал-Ахари. Тарих-и Шейх Увейс. Баку, 1984, с. 132. (Аб・バクル・アリ・クトビ・アリ・アハリ、『ターリヒ・シェイフ・ウベイス』、バクー、1984、132頁)
  - 6 Йакут-ал-Хамави. Му'джам ал-Булдан. Хамдаллах Казвини. Нузхат-ал-кулуб. - Баку, 1983, с. 56. (ヤクット・アリ・ハマビ、ムジャム・アリ・ブルダン、ハムドゥラフ・カズビニ、『ヌズハット・アリ・クルブ』、バクー、1983、56頁)
  - 7 Шараф-хан ибн Шамсаддин Бидлиси. Шараф-наме. Том 1. - М., Наука, 1967, с. 534. (シャラフハン・イブン・シャンサディン・ビドリシ、『シャラフナме』、第1巻、モスクワ、ナウカ出版社、1967、534頁)
  - 8 Аббас-Кули-Ага Бакиханов. Гюлистан-и Ирам. - Баку, 1991, с. 203. (アバスクリ・アガ・バキハノフ、『ギュリスタニ・イラン』、バクー、1991、203頁)
  - 9 Йакут-ал-Хамави. Му'джам ал-Булдан. Хамдаллах Казвини. Нузхат-ал-кулуб. - Баку, 1983, с. 56. (ヤクット・アリ・ハマビ、ムジャム・アリ・ブルダン、ハムドゥラフ・カズビニ、『ヌズハット・アリ・クルブ』、バクー、1983、56頁)
  - 10 Рашид-ад-дин. Переписка. - М., Наука, 1971, с. 270. (ラシダディン、文通、モスクワ、ナウカ出版社、1971、270頁)
  - 11 Рашид-ад-дин Фазлуллах Хамадани. Асар ве ахйа. Тегеран, 1336 (на фарси), с. 46. (ラシダディン、ファズラフ・ハマダニ、『アサル・ベ・アフヤ』(ペルシア語)、テヘラン、1336、46頁)
  - 12 Пириев В.З. Азербайджан в XIII-XIV вв. - Баку, Нурлан, 2003. (на азербайджанском), с. 97-109. (V. Z. ピリイェフ、『十三・十四世紀のアゼルバイジャン』(アゼルバイジャン語)、バクー、ヌルラン出版社、2003、97-109頁)
  - 13 Есаи Хасан-Джалал. Краткая история страны Албанской (1702-1722 гг.). - Баку, Элм, 1989, с. 6. (エサイ・ハサン・ジャラル、『アルバン国の歴史略記(1702-1722)』、バクー、エルム出版社、1986、6頁)
  - 14 Орбели И.А. Хасан-Джалал, князь Хачинский. - Избранные труды. - Ереван, 1963, с. 146-161. (I. A. オルベリ、ハチエン公爵ハサン・ジャラル、『選集』、エレバン、1963、146-161頁)
  - 15 Йакут-ал-Хамави. Му'джам ал-Булдан. Хамдаллах Казвини. Нузхат-ал-кулуб. - Баку, 1983, с. 56-67. (ヤクット・アリ・ハマビ、ムジャム・アリ・ブルダン、ハムドゥラフ・カズビニ、『ヌズハット・アリ・クルブ』、バクー、1983、56-57頁)
  - 16 Буниатов З.М. Несколько замечаний по поводу этнических процессов в Ширване. (до первой трети XIII в.). (Z. M. ブニヤートフ、『シルヴァンのに於ける民族プロセスに関する備考(13世紀前半)』)
  - 17 Шихаб-ад-дин Мухаммед ан-Насави. Жизнеописание Султана Джалал-ад-дина Манкбурны. - Баку, 1973, с. 274. (シハバディン・ムハッмед・アンナサビ、『ジャララディン・マンクブルナ王の生涯』、バクー